

国語科

「言葉の力」を実感し合う学習指導

—古典文学の学習を通して、「生きる力」を育む学び合い—

提案者 石井 健介 川嶋 正志 菅 俊輔 松原 洋子

キーワード 「言葉の力」 「生きる力」 学び合い

1. 国語科の「深い学び」

国語科における「深い学び」とは、

- ① 様々な単元や教材の学習を通して言語表現に関わる知識や技能、思考力・判断力・表現力等を習得する。
- ② ①で習得した知識や技能、思考力・判断力・表現力等を新たな単元・教材学習においても活用する。
- ③ それぞれの作品や表現自体を味わい、読み進めながら、その作品・表現が成された背景や作者・著者の他の作品等、そこから派生する様々な関連作品・表現にも多面的、多角的に触れる。
- ④ 単元・教材学習の一連の過程を楽しみながら、意欲的に、「言葉の力」を実感する。
- ⑤ ①～④の過程を経て理解や思考力・判断力・表現力等をさらに深化させていく。

という、往還あるいは循環の形態をもった、教科の言語活動の充実という本質に迫る学びであると考え。そして、本校国語科は、本校紀要52号に、以下のように記している。

国語科における生徒の「意欲の高まり」とは、ある単元・ある教材に対して、それまでの事前の学習を経た上で、「もっとこの教材（に関するもの）を読み深めたい」「もっとこの教材について話したい・聞きたい」「もっとこの教材に関して表現したい（書きたい）」「もっとこの教材について知りたい、深めたい」等、「言葉による様々な表現」を用いた学習の中で、生徒一人ひとりが新たな学び、気づきを主体的に求めていく姿勢と取り組みの深化・向上、であると考え。

（東京学芸大学附属小金井中学校研究紀要52号）

国語科における継続的、広汎的な「深い学び」の実践を図るためには、上記のような、生徒自身の国語科の学習や単元・教材に対する様々な「意欲の高まり」の、継続的な持続が不可欠である。その「意欲の高まり」が様々な学習過程での活動の土台となることによって、個々の生徒一人ひとりとして、あるいは学習集団として、新たな知識や理解の獲得を進め、一単元や一教材を超えた、多くの単元・教材学習の絶え間ない継続や往還の中で、「深い学び」をより充実させ、その学びを次の実践に活かしていくことが求められている。そのためには、適宜「意欲の高まり」そして「深い学び」の実践に繋がる教材を投入すること、そして授業者対学習集団（全体、班、ペア、個人）をはじめとする、他との関係があって成立する「学び合い」の場を効果的に設定し、他との交わりの中で気づく新たな視点や知識・理解の往還を実感させながら、授業を進行していくことが重要である。

2. 「国語科の協議主題」設定の理由

昨年度までの実践をふまえ、「言葉の力」を実感し合うこと、そして「生きる力を育む学び合い」という大きな柱はそのまま踏襲し、本年度より改めて、「生きる力を育む」単元・教材として古典文学における表現に焦点を絞り、古典文学の学習を通して「生きる力を育む」授業の実践を企図し、取り組みを進めることとした。

「生きる力」とは、単に衣食住を全うするための経済的な力、あるいは心身の壮健を維持し、病等を克服し、命を永らえる力のみを指すものではない。命に直接的に関わる問題だけでなく、自分がどのよ

うに生きていくかをしっかりと見つめることができる力もその過程には含まれている。実はこのことは昨年度までの実践でも意識されていて、教材文での学びや気づきを発展させて、単なる肉体の消滅の有無をともなった「生死」という概念だけではなく、自分のこれまでの生活やこれからの人生につなげて考えるという、自らの「命（＝生き方、人生）を見つめる姿勢」に繋げ、様々な価値観を持って「生きる力」「生きていこうとする姿勢」を醸成していくことに結びつけられた。

そこで本年度は、昨年度までの「生死」に直結することの多い「病（やまい）」・「戦（いくさ）」・「災（わざわい）」という学習の柱を超え、これまでの様々な人々や時代状況によって残された言語表現の積み重ねの中から、様々な人々の人生観や生き様、それらが形成されるに至った時代背景等に触れ、日本人の様々な価値観の醸成や変遷を実感するといった過程を経て、学習の広がり、理解の深まりを持たせたいと考えた。そこで、教科としての主題を、「言葉の力」を実感し合う学習指導～古典文学の学習を通して、生きる力を育む学び合い～」とした。本年度はその一端として、古典文学の学習の中で、「自然」との向き合いを柱として、その「自然」との向き合いの中から、改めて自らの生活や人生に活かせる「生きる力」にあたる表現や文脈を見出し、価値付けていくことを目指して、実践を行うこととした。授業の中で、生徒一人ひとりがひとつひとつの言葉について、辞書的な意味にとどまらず、脈々と受け継がれてきている「言葉の力」に気づきながら価値付けを行うことができる場を設定していく。

3. 国語科において、「深い学び」を創造するためのしかけ・場の設定

本校国語科では、昨年度まで「言葉の力」の実感を通した「命をみつめ生きる力を育む」国語科の授業の実践を目指し、「言葉の力」を実感し合う学習指導～命をみつめ、生きる力を育む学習指導～」を教科主題に設定していた。その上で、「病気（病～やまい～）」「戦争（戦～いくさ～）」「災害（災～わざわい～）」を各学年の単元・教材を貫くテーマとし、既存の単元・教材を活かしつつ、新たな単元・教材開発ならびに授業実践を図った。一昨年度は現代文の作品・表現、昨年度は古典の作品・表現を、それぞれ単元・教材の核とし、様々な言語表現を用いて、授業実践した。

本年度より新たに「言葉の力」を実感し合う学習指導～古典文学の学習を通して、生きる力を育む学び合い～」を教科主題とした。生徒の「意欲の高まり」を土台とした「深い学び」の実践を追究しつつ、生徒一人ひとりや集団としての多様な価値観を形成しながら、「言葉の力」を実感させたい。そして、様々な形態での学び合いを通して、「自然と向き合う」ことの核に「言葉」「言語表現」を据えるからこそ、学び、気づき、育むことのできる「生きる力」を、それぞれの生徒が見出していくことで、「深い学び」に繋がっていく授業実践を図っていきたい。

3. 3 単元名「いにしへの心と言葉を見つめる」 第3教材「おくのほそ道」（中学3年）

3. 3. 1 単元の目標

- ①音読や暗唱をとおして、日本語のリズムのよさを実感する。
- ②俳句・漢詩・俳諧紀行文のそれぞれを読み、先人の視点や表現方法を学ぶことで、自分の生き方や表現法がどうあるべきか思考する。

3. 3. 2 単元の構成（全14時間扱い）

- | | | |
|------|------------------|-------|
| 第1教材 | 近代の俳句（俳句の歴史も含める） | （4時間） |
| 第2教材 | 漢詩 | （4時間） |
| 第3教材 | おくのほそ道（松尾芭蕉 作） | （6時間） |

3. 3. 3 単元設定の理由（省略）

3. 3. 4 第3単元『おくのほそ道』の学習指導計画（6時間扱い）

- | | | |
|-----|--|---------|
| 第1次 | 『おくのほそ道』の概要を知る。（文学的知識） | （0.5時間） |
| 第2次 | 『おくのほそ道』の冒頭・平泉・立石寺の部分から、作者の見た情景や心情を読み取る。 | （5時間） |